

【有償配布 や Web(ホームページ, ブログ, facebook 等)へのアップロード・転載はお止めください】

【リンクはご自由にお貼りください】

「結婚の自由をすべての人に」東京第二次訴訟(東京地裁)第5回期日(20220630)提出の書面です。

令和3年(ワ)第7645号 「結婚の自由をすべての人に」訴訟事件

原告：山縣真矢 外7名

被告：国

## 原告山縣真矢意見陳述

2022年6月30日

東京地方裁判所民事第44部甲合議1A係 御中

原告 山縣 真矢

### ■はじめに

原告の山縣真矢と申します。

1967年に岡山県倉敷市で生まれ、現在55歳です。出会って今年で24年目となる、1歳年上の同性のパートナーと一緒に都内で暮らしています。

三人兄弟の長男で、父は高校教師、母は公務員という堅実な家庭で育ちました。里山に囲まれた自然豊かな土地で幼少期を過ごし、中学・高校時代は部活動の軟式テニスに明け暮れる、どこにでもいる田舎の少年でした。

### ■「ゲイ」として生きる

1993年、26歳で上京し、雑誌の編集者として、社会人への第一歩を踏み出しました。なんとなく女性とデートしたりすることもありましたが、付き合う気は起こらず、「結婚」を真剣に考えたこともありませんでした。

【有償配布 や Web(ホームページ, ブログ, facebook 等)へのアップロード・転載はお止めください】

【リンクはご自由にお貼りください】

「結婚の自由をすべての人に」東京第二次訴訟(東京地裁)第5回期日(20220630)提出の書面です。

それでも、20代も半ばを過ぎると、友人たちが次々に結婚しはじめ、両親からは「いい人は、いないの？」と聞かれるようになります。

次第に「結婚」という二文字を意識するようになり、「結婚するなら、どんな人なのだろう？」と、思春期からの自分の人生を振り返ってみました。すると、思い浮かんだのは部活動の後輩、それも男子ばかりで、そのことに自分でもとても驚きました。もしかして「男の子が好きなのかも?」。そんな思いが、ふっと湧いてきました。

そう思ったとき、どういうわけか、ある青年の姿が記憶の底から呼び覚まされてきました。

1990年夏、偶然テレビで観た深夜の情報番組。ブラウン管の向こう側で一人の若者が、同性愛者であることを堂々と表明し、力強く訴えかけています。青年は、その年の2月に東京都の「府中青年の家」で起きた同性愛者への差別事件の現場にいた、「動くゲイとレズビアンの会」、通称アカーのメンバーでした。翌年、アカーは東京都を提訴し、青年は原告となりました。彼こそが、本訴訟に意見書を寄せられている風間孝さんでした。

ちなみに、その裁判の代理人は、本訴訟の代理人でもある中川重徳弁護士であり、永野靖弁護士はその事件の現場に居合わせたメンバーの一人でした。

風間さんの姿がどうして甦ったのか。今でも不思議なのですが、同じ年に生まれた、ごく普通の青年が、当事者として同性愛者への差別を訴えているその姿が、とても凛々しく、強烈だったのだと思います。

それをきっかけに、自分の中のモヤモヤを解消しようと、本や雑誌で同性愛に関する情報を集め始め、特に伏見憲明さんの『プライベート・ゲイ・ライフ』は、私に「ゲイのロールモデル」を示してくれて、「ゲイである自分」をかなりイメージできるようになりました。そのイメージが本物なのかどうか。それを確認するために私がとった行動は、ゲイ専門の映画館に足を踏み入れることでした。初めて入るゲイ映画館。初めて観るゲイ映画。暗闇の中で隣の席から伸びてくる手に戸惑い

【有償配布 や Web(ホームページ, ブログ, facebook 等)へのアップロード・転載はお止めください】

【リンクはご自由にお貼りください】

「結婚の自由をすべての人に」東京第二次訴訟(東京地裁)第5回期日(20220630)提出の書面です。

ながらも、期待している自分がいました。極度の緊張と不安でおどおどしながら、私は時の流れに身をまかせました。当時はまだ、こんな冒険でもしなければ、同性愛者と出会うこともできなかったのです。その日、私は自分がゲイであることを確信し、幸運にも、そこで出会った人が、今でも関係の続く、初めてのゲイの友人になりました。

その友人に連れられて、初めて新宿二丁目のゲイバーに入り、そこからゲイの友人関係が広がっていきました。ようやく辿りついた「居場所」に身を置いた私は、水を得た魚のように、楽しく気持ちよく泳ぎ回っていました。

一方、職場では、数人の信頼できる同僚にだけカミングアウトした以外は、ゲイであることをオープンにせず、編集者として忙しい毎日を送っていました。

## ■パートナーとの出会い

パートナーと出会ったのは、1998年の真夏のことでした。

いつものように私は、新宿二丁目の行きつけのゲイバーに入ると、隣にとっても好みの男性が座っていました。

ここぞとばかり、口説きモードで話しかけましたが、1時間もしないうちに彼は帰ってしまいました。スマホもケータイもない時代です。今度いつ会えるかも分かりません。私はバーのスタッフにお願いして、自宅の電話番号と名前を書いた付箋を、彼のキーボトルに貼ってもらいました。

彼のことを半ば忘れかけていた夏の終わりに、ようやく電話がかかってきました。彼の低い声が、耳にやさしく響きました。そして再会を果たし、お互いを確かめ合い、平成10年10月10日、私たちは付き合うことになりました。

毎晩、必ず電話で声を聞き、週末にはデートをして、1年後、同居を始めました。といっても、彼のアパートを二人の生活の場として、私はその近所に安い別の部屋を借り、自分の住民票はそこに置きました。

【有償配布 や Web(ホームページ, ブログ, facebook 等)へのアップロード・転載はお止めください】

【リンクはご自由にお貼りください】

「結婚の自由をすべての人に」東京第二次訴訟(東京地裁)第5回期日(20220630)提出の書面です。

というのも、当時の日本において、男性同士で同居することを不動産屋に説明し、交渉するのはとても煩わしいことだったし、両親にカミングアウトをしていなかで、同居することを説明するのも面倒で、私たちの秘密を守りながら同居するための、私たちなりに考えたカムフラージュでした。そのための費用は、必要経費だと諦めていました。

その後、パートナーが購入したマンションに引っ越しましたが、そこに私の住民票を移したのはほんの5年ほど前のことでした。この間、15年以上にわたって、私はアパートを借り続けていました。2018年に私たちが住んでいる自治体で「同性パートナーシップ宣誓制度」が始まり、それを利用するために、私の住民票を彼のマンションに移し、長年のカムフラージュに終止符を打ちました。

もし同性間でも婚姻が認められていれば、お金もかかるカムフラージュをする必要もなかったでしょうし、二人で共同ローンを組んでマンションを購入する選択肢もあったかもしれません。

けれども、私たちが付き合い始めた1998年当時、同性間で結婚ができる国はまだ地球上にはなく、私たちに「結婚」という発想も計画もありませんでした。2001年4月には世界で初めてオランダで、いわゆる同性婚ができるようになり、各国に広がっていきましたが、日本で暮らす私たちは、まったく現実味を感じることができませんでした。今思えば、差別や偏見から私たちを守る法制度が何もない中で、本来なら認められるべき婚姻制度から排除されてしまっているという自覚さえも持てずにいたのだと思います。

#### ■東京の「プライドパレード」の運営に携わって

53年前、1969年6月28日にニューヨークで起きた「ストーンウォールの反乱」をきっかけに、セクシュアル・マイノリティの「プライドパレード」が世界に広がり、日本では1994年8月28日に、東京で開催されたのが最初です。

【有償配布 や Web(ホームページ, ブログ, facebook 等)へのアップロード・転載はお止めください】

【リンクはご自由にお貼りください】

「結婚の自由をすべての人に」東京第二次訴訟(東京地裁)第5回期日(20220630)提出の書面です。

「プライド (Pride) 」という言葉は、一般的には「誇り」や「矜持」を意味しますが、現在では、セクシュアル・マイノリティのパレードやイベントを表す言葉としても、国際的に広く認知されています。毎年6月はストーンウォールにちなんで「プライド月間」とされ、世界各地でプライドパレードや関連イベントが開催されています。

私が初めて運営に携わった2002年の『東京レズビアン&ゲイパレード』は、約2,700人が行進し、総動員数は約4,500人でした。

それ以降も私はパレードの運営に関わり続け、2011年、現在の主催団体である「東京レインボープライド」の設立に参画し、2012年には団体の代表になり、2015年にNPO法人化してからは共同代表として、2019年9月に勇退するまで、主催団体を牽引してきました。

コロナ以前の2019年の『東京レインボープライド』は、10,000人以上がパレードに参加し、総動員数は約20万人でした。

2010年代、私は「LGBTブーム」のただ中で、プライドパレードの運営に身を置いて、セクシュアル・マイノリティの存在の可視化と理解がかなり進んできたことを実感してきました。

## ■両親への「カミングアウト」

2008年10月14日。

突然、父から電話がかかってきました。

いわく、インターネットで私の名前を検索したところ、ゲイや同性愛の団体・イベントに複数ヒットしたのだが、これは、どういうことなのか？

少しあらたまったような物言いで、かといって詰問するような調子でもなく、父は真剣に語りかけてきました。

【有償配布 や Web(ホームページ, ブログ, facebook 等)へのアップロード・転載はお止めください】

【リンクはご自由にお貼りください】

「結婚の自由をすべての人に」東京第二次訴訟(東京地裁)第5回期日(20220630)提出の書面です。

ずっとカミングアウトをしたいと考えていたし、もう隠し立てすることもない  
と思い、自分のセクシュアリティについて丁寧に説明し、パレードをはじめ携わっ  
ている活動についても話をしました。

それに対して父は、「いつごろからか?」「女性になりたいのか?」などと聞  
いてきて、そのときは「同性愛」と「性同一性障害」を混同していたようでした。

その3週間後、11月5日の日付で父から直筆の手紙が送られてきました。

「『自認』し、今日までの十五年、両親にも言えず、言わず、孤独で、せつない  
思いをしながら生きて来たことを思うと、言葉がありません」

「よくぞ苦悩を乗り越えて生きていてくれたとの思いが強くしています」

「このたびのカミングアウトによって眼を開かせてくれたことをうれしく思っ  
ています」

その手紙には、息子を思う父の深い愛情が、存分に詰まっていました。

高校の教員だった父は、教え子に性同一性障害の生徒がいたこともあって、私の  
ことをそれと混同していたようでした。しかし、この間に関連する本を読み、性的  
指向と性自認の違いについて理解したそうです。また、知人に自殺した当事者がい  
たそうで、私が「生きていてくれたこと」を何よりも尊く感じてくれたよう  
でした。

その一方で母は、ずっと心の整理がつかなかったようですが、2020年末に帰省  
した際に本訴訟の原告になることを伝えると、思いのほかすんなりと受け入れてく  
れました。父によると、母は、2020年11月に放映された、私のインタビューも使

【有償配布 や Web(ホームページ, ブログ, facebook 等)へのアップロード・転載はお止めください】

【リンクはご自由にお貼りください】

「結婚の自由をすべての人に」東京第二次訴訟(東京地裁)第5回期日(20220630)提出の書面です。

用されている NHK の『逆転人生』という番組を観てくれていたそうです。母は母なりに関心を持ってくれるようになったことを、大変嬉しく思っています。

## ■この訴訟に望むこと

私もパートナーも還暦が見えてきて、「老・病・死」が確実に迫ってきます。私は腎臓に持病を抱えてもいます。「老・病・死」の不安は、誰にでもあるものですが、婚姻できない同性カップルは、よりシビアで不安定な状況に置かれています。

先日、大阪地裁の判決を傍聴しました。裁判長がすべてを読み終えたあと、私は全身の力が抜け、しばらく立ち上がることができませんでした。セクシュアル・マイノリティに寄り添おうとせず、同性愛への無知や偏見を突きつけられた思いがし、強い憤りを覚えました。そのダメージはとても大きく、10日経ってもボディブローのように効いていて、失望と無力感で、今ここで陳述するのも辛いほどです。

人生は一度きりです。その私の人生において、パートナーが法律上同性であるということだけで婚姻制度から排除され、国から差別を受けたまま、二級市民として生涯を終えたくはありません。差別が温存された状態のまま、次の世代にバトンを渡すようなこともしたくありません。

残り何年、私の寿命が残っているのかは知る由もないですが、1日も早く、この不平等な状態から、私たちを解放してください。

本日6月30日は、プライド月間の最終日です。

そこで、この言葉で私の意見陳述を締め括りたいと思います。

世界各地のプライドパレードで使われる、あの「合言葉」です。

【有償配布 や Web(ホームページ, ブログ, facebook 等)へのアップロード・転載はお止めください】

【リンクはご自由にお貼りください】

「結婚の自由をすべての人に」東京第二次訴訟(東京地裁)第5回期日(20220630)提出の書面です。

憲法では「幸福追求権」が謳われています。セクシュアル・マイノリティであっても「らしく、たのしく、ほこらしく」、みんなが夢を持って、虹の彼方に、幸せな未来を築いていけますように。そして、大阪地裁判決に傷つき、憤り、悲嘆にくれている仲間たちに、希望の光が射しますように。

そんな願いをこめて。

Happy Pride (ハッピー・プライド) !